第3章 障がい者・高齢者をめぐる取り組み第2部 各分野での震災後の取り組み

池田しのぶ

はじめに

紹介していく。

1 宮古市における福祉の概況

① 高齢者および障がい者の概況

10月1日現在で33・2%となっている。総人口は年々減少し、内10月1日現在で33・2%となっている。総人口は年々減少しており、障者世帯数も増加しており、65歳以上の高齢者が増加しており、65歳以上の高齢者が高いる世帯の方ち、高齢者世帯数も増加しており、65歳以上の高齢者がいる世帯の方ち、高齢者は495人(人口比0・8%)である。震災前後で所持者数に変動はかられないが、等級別でみると1級の手帳所持者が増加しており、61時代率も高齢者は495人(人口比0・8%)である。震災前後で所持者数に変動は海方により、61年でがい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また、宮古市障がい者福祉計画(第4期)によると、平成26年4月また。第4時代表表が、第4時代表表が、第4時代表表が、10月1日現在で33・2%と思われる。また高齢化率も高齢者が、10月1日現在で33・2%と思われる。また高齢化率も高齢者が、10月1日現在で33・2%と思われる。また高齢化率も高齢といる。2%と関する。2%に関する。2%に関する。2%と関する。2%と関する。2%と関する。2%と関する。2%と関する。2%と関する。2%に関する。2%と関する。2%と関する。2%に関する。2%と関する。2%に関する。2%と関する。2%に関する。2%に関する。2%と関する。2%に関する。2%に関する。2%と関する。2%に関する

いる。 身体障害者手帳の対象となる7つの障がいのことを言う)が増加して 部障がい(心臓機能障がい、腎臓機能障がい、消化器機能障がいなど、

る。

次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高

(2) 被害の概況

うち障害者の死亡者数(対宮古市障害者人口比)36人(1・1%)宮古市の全死亡者数(対宮古市全人口比) 525人(0・9%)うち障害者の人口 3千371人(障害者手帳所持者数)宮古市の全人口 5万9千636人

※内訳:身体障害2人、知的障害2人、精神障害7人、身体知

的重複障害1人

2 要介護者、障がい者、家族の避難と避難生活

ていくことにする。

でいくことにする。

でいくことにする。

の方が語っている。次に、ひとりひとりの語りを聞いたのだと、多くの方が語っている。次に、ひとりひとりの語りを聞いるからすぐに高台に逃げる、という判断や日常的な備えがあったかどるからすぐに高台に逃げる、という判断や日常的な備えがあったかどこの調査では、逃げ延びることができる。大きな地震のあとは津波が来この調査では、逃げ延びることができる。大きな地震のあとは津波が来るがら大きにする。

高齢者世帯

元は田老野原住)に、2012年9月11日、お話しを伺った。 田老のグリーンピア仮設に住んでいる千葉昭子さん(昭和17年生、

屋内はつたい歩き、屋外は車いすでの移動が可能である。なったが、その後リハビリにより徐々に快復し、現在は要介護度2、中に事故に遭い、頸椎損傷の大けがを負った。一時寝たきりの状態と夫(昭和15年生)は54歳の時に、当時勤務していたタンカー船の航海昭子さんは山田町出身で、26歳で田老町に嫁いできた。昭子さんの

夫の腰から下がぬれてしまった。 大の腰から下がぬれてしまった。 大きな地震のとき、昭子さんは日課の散歩中だった。大きな地震

火の手があがり、火事になった。近所から逃げてきた若い人たちは道車いすを捨てて、道のないところ、斜面をあがっていった。近くで

たが、ただ明るくなるのを待っていた。ても寒かった。夫はぬれたままだった。物音や声は聞こえず寂しかっ山の頂上に近いところまで上がって休んでいた。雪が降っていて、との駅の方に向かって歩いていったが、自分たちは歩けないので3人で、

誰か、神さまか仏さまが助けてくれたと思った。 たちの反対側に火がよけていった。とても不思議だった。そのときは、りにした。すると、何か冷たい空気が来た、と思ったら、ふわっと私土俵のように丸く木の葉をよけろと言ったのでNさんと2人でその通めた。火の回りはとても早かった。このまま死ぬかもと思った。夫が、風が吹き、自分たちをめがけて火が向かってきて、木の葉が燃え始

なくなって寒くなった。ようだった。しばらくすると、火の気がようとしたがわからなかったようだった。しばらくすると、火の気が上空をヘリコプターがまわっているのがわかった。懐中電灯で知らせを集めて暖をとった。多分、その日の夜中、1時か2時頃だと思う。火の粉が飛んできたのでその後は寒くなかった。火がくすぶった木

町出身なので、子どもの頃からそういった防災意識をもっている。持ち出し袋に入れる、ということを習慣としていた。昭子さんは山田かして水筒にいれて枕元においておく。朝起きたら水筒を玄関の非常出し袋は、いつも玄関に用意してあるもので、お湯は毎晩寝る前に沸非常持ち出し袋に入れてあったお湯を3人で飲んだ。この非常持ち

ていて、火がそこまで近くにきていたかと思い、ぞっとした。ピアにたどり着いた後で服をみたら、火の粉が飛んだあとが穴になっソンの近くにあった車屋さんのところまで行った。それからグリーンをおろして行くと、消防団の人たちに出会った。夫を担架に乗せてローそのうちに明るくなってきたので、夫をずるずると引っ張って坂道

ら食事の支度をしなきゃならないの」「アキちゃん、私は何もできないしまった。「おうちに帰りたいわ、この火は何なの?孫が帰ってくるかで待っている間、同じことを何度も何度も繰り返して言うため参ってNさんはぴんぴんしていて元気で力もある。認知症なので、山の中

んを私のところに連れてきてしまった。 歩き回る。一緒に避難している人たちが、それに気づくとすぐにNさどグリーンピアに預けて行った。Nさんは1人でいろいろなところにてしまった。Nさんの家族は宮古にいて、仕事があるからと1週間ほンピアに到着したが、朝食の列に並んでいる間に私の具合が悪くなっいと思えることもあったが、やはり辛かった。12日、朝食の時間にグリーから、指図してね、言うとおりに動くからね」とくり返した。頼もし

その度に連れていかなければならなかったからだ。が大変だった。失禁を心配して1日に何十回もトイレに行きたがり、大はグリーンピアの車いすを借りて使っていたが、トイレに行くの

削り当てられた。 の移動が大変だった私たちは、7階のトイレとベッドがある部屋をへの移動が大変だった私たちは、7階のトイレとベッドがある部屋をいたので静か過ぎたから。そこで過ごした3日間も辛かった。トイレと2人きりになったときがとても怖かった。窓もなく、防音がきいてと2人きりになった。その時、数日間カラオケボックスに移動して夫でリーンピアの部屋割りなどをするために、避難者は一旦アリーナ

だと思う。とぽろぽろ涙が出た。でも、それがあったからなんとか乗り切れたのとぽろぽろ涙が出た。でも、それがあったからなんとか乗り切れたの、グリーンピアに着いてからの3日間は、夜になり、布団に横になる

の家の近くでガソリンを入れてきた。ピアにいる時に、ドコモの無料電話で呼び出しがあった。盛岡の次男にいる三男は携帯が通じるようになってすぐに連絡がきた。グリーン害はなかった。地震後1週間してからようやく連絡がとれた。北海道子どもたちについてだが、長男は家が釜石、職場も鵜住居だが、被子どもたちについてだが、長男は家が釜石、職場も鵜住居だが、被

だ。ほとんど家から出ないので、このまま動けなくなりそうだ。 今の仮設住宅での暮らしは、夫が動けなくなるのではないかと心配

千葉さん夫妻は2015年12月末現在、宮古市崎山に新築した自宅

るという。
音が聞こえたりすると当時のことを思い出し、とても嫌な気持ちにないの音が聞こえたり、津波注意報やトラックが大きな音をたてて通るになってよかった、と安心した表情である。しかし、今でも、サイレで暮らしている。仮設住宅から出て1軒の家に住むことができるよう

本の様子をみていたや野さんご夫婦は、近かで、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が直、大急ぎで5分以内で逃げたので、お巡りさんが右往左往でに出ないと」と言ったそうだ。正博さんの判断も早かった。位牌1分で、赤沼山へは車で逃げられない。どうする?車で逃げる?車ならすら。赤沼山へは車で逃げられない。どうする?車で逃げる?車ならすががががったと後で思った。逃げる途中で、お巡りさんが右往左往でればよかったと後で思った。逃げる途中で、お巡りさんが右往左往でればよかったと後で思った。逃げる途中で、お巡りさんが右往左往ではないとうに、大急ぎで5分以内で逃げたので、もっと荷物を持って逃ずの地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、

と思う。
じの大きさは、家のきしみ方の違いでわかった。防波堤があっていたら、100%逃はあった。あれほど大きな津波が来るとわかっていたら、100%逃よかった面はある。地震から津波まで時間があったので、逃げる時間地震の大きさは、家のきしみ方の違いでわかった。防波堤があって

かはわからず心配していた。4日後にようやく連絡がついた。で連絡がきて、無事を確認していたが、私たちは家族がどこにいるの動して、そこで親たちと合流したようだ。津波直後に、長男から携帯所の裏側の山にあがった。その後、内陸の神田の集会所から北高に移は波が見えていたと聞いた。先生に各自逃げろと言われて、総合事務系は田老第一中学校の校庭に集められたらしい。校庭に出たときに

よる弊害もある、と語った。

正博さんは旧田老町役場で、長く総務課長をつとめていた方である。
正博さんは旧田老町役場で、長く総務課長をつとめていた方である。

を送った飼い猫のモモとともに神田地区の新しい家で生活している。 牧野さん夫妻は2015年12月末現在、長男家族や一緒に避難生活

(2) 家族が同居しているケース

谷住)に、2012年9月12日に話しを伺った。 女リーンピア仮設に住んでいる**下西辰雄さん**(昭和3年生、元は荒

震災が起きたときの住所は荒谷であった。
の動きが悪くなった。小さな字は書けなくなって、たまに箸を落としる。辰雄さんは津波から逃げるときに手を怪我してしまい、その後手スに通い、ヘルパーも利用してグリーンピアの仮設住宅で暮らしてい護度5)と、息子家族と同居している。妻はふれあい荘のデイサービーのが出きたは、リウマチで透析治療をしている妻(昭和7年生、要介

た。3・11当日は散歩中に大きな地震がきたので家に帰ったが、家の震災以前は、毎日14時に散歩に出て、八幡神社まで行くのが日課だっ

思い、すぐに逃げた。波は速かった。ていた。嫁は沖が白くなっていると言った。それを聞いて、津波だとうすればいいかなと言いながら、近所の人が診療所の駐車場に集まっ孫が車のラジオを聞いていた。息子は浜の方へ行ったようだった。ど中の物は倒れていなかった。停電していたのでテレビは消えていた。

が来る前に熊野神社の方へあがっていった。目だったと思う。その後も何度か波がきたらしいが、私は2度目の波ていたので助かったのだと思う。フェンスの上につかまっていたら駄上側をガリガリといって流れていった。フェンスの真ん中につかまっすぐ裏にあったフェンスにつかまっていたら、瓦礫と波はフェンスのができて助かったのだと思う。津波がきて、波に押された。家を出てができて助かったのだと思う。津波がきて、波に押された。家を出て

れた人のことを話していた。
ま(妻)の着替えを持って逃げたので、それを着ていた。皆で逃げ遅せて担いで、消防団の人たちとも協力しながら逃げた。嫁は、ばあさ逃げられないので、避難所にあったじゅうたんやシート、座布団に乗あねさま(嫁)たちは山へ逃げた。車いすの人や年寄りは階段だと

マーで自動販売機を壊して、中の飲み物を配っていた。 総合事務所で一番困ったのは水がなかったことだった。職員がハン

思う。病院に着いてもけが人が大勢いて、長い時間待たされた。首かれて行かれた。自衛隊が道路を片付けていたらしいが、大変だったと自衛隊の人に支えられて線路まで歩いたあと、救急車で宮古病院へ連翌日、診療所の先生が私の手を治療しようとしたが、薬がなかった。

えていないという)。 ら色のついた紙を提げられた(トリアージ・タッグのことか。色は覚

住宅に入ったのは6月だった。 治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まる 治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まる 治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まる 治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まる 治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まる

せてくれた。 下西さんは、昭和8年の津波も経験している。その時のことも聞か

て来てしまった。
昭和10年の秋に、高台に家を建てた。それなのに、徐々に低い場所に移っ誰の土地、ということもなく、よさそうな場所に家を建てるのだった。
礫を集めてきて、それぞれに釘を打ったり結んだりして家をつくった。
ぐって、2、3日過ごした。それから母親の実家に行った。当時は瓦とは詳しく覚えていないが、津波のあと、家族がむしろで風よけをつ
昭和8年の津波のときは5歳だった。朝の津波だった。その日のこ

く、早く、なんとか家だけでも建てたい。 さなければならないと思う。国が何かをしてくれるのを待つのではなもらうものはもらうというのは違うのではないかと思う。いつかは返人たちは、国、国という。自分たちでやればいいと思う。ありがたいが、している、その分税金を払っているのかもしれないけれど。今の若い山を削って平らな土地をつくり、そこに家を建てた。今は国を頼りに当の人は、国から援助を受けたかどうかわからないが、自分たちで

や3回家を建てている。そのたびに平地に下りてきた。いと思うが、若い人がどう考えるかだ。私たちは昭和8年以降、2回野原地区は、高台から下りてきた人ばかりだ。高台に住んだ方がい

何かやっていれば来て、気晴らしをしている。 はできないと言われた。今は、妻がいない時に、集会所をのぞいてみて、りになったらどうしようかと先生に尋ねたら、病院に入院させることリハビリに通ったがほとんどよくならず、要介護5となった。寝たきた。ふれあい荘にいるときに脳梗塞になり(宮古病院に50日入院した)いるところを、車いすに乗せてトイレに連れて行った。それが大変だっいるところを、車いすに乗せてトイレに連れて行った。みんなが眠って

設して移転する予定である。 現在も仮設住宅に住んでいるが、2016年中に三王団地に住宅を建・奥さんは2015年6月5日に亡くなった。下西さん家族は12月末

私は16年間母を介護してきたが、震災を契機に母は機能低下で食事私は16年間母を介護してきたが、震災を契機に母は機能低下で食事私は16年間母を介護してきたが、震災を契機に母は機能低下で食事私は16年間母を介護してきたが、震災を契機に母は機能低下で食事があると考えているが、この15時に母の訪問入浴が予定されていたが、可成8年7月に脳梗塞となり、退院後は再び家店のかったので杖をついての生活だった。若い人たちの生活についてにしていたので杖をついての生活だった。若い人たちの生活についてにしていたので杖をついての生活だった。若い人たちの生活についていくのは大変になってきたということで、家の前の物置を改造したというまくできなくなってきたが、日本の前のが一つがのポイントだった。

地震のときは、私と夫と三男が母と一緒にいた。母を入浴できるよ

来てくれた。後で聞いたら、波に追いつかれそうだったという。来てくれた。後で聞いたら、波に避難していた近所のお母さんが手を引きには見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが手を引きには見かねたのだろうで「すぐ逃げろ」と叫んだ。後ろを見ずにひたすがは見かなかったら津波が来るまで気づかず駐車場にいたと思う。大平を聞かなかったら津波が来るまで気づかず駐車場にいたと思う。大平は見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが手を引きには見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが手を引きには見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが手を引きには見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが逃げて行ったのを家の前の駐車場で待機していた。隣のお母さんが逃げて行ったのを家の前の駐車場で待機していた。

済んだ家の人も亡くなったのは、外出先でのことだった。高台に上りていたそうだ。大丈夫だろうと油断した人はいたと思う。床下浸水でのMさんは家を出たのにもう一度家に戻ったらしい。家の中で亡くなっあの人がいない、あの人はどうした、と言い合って心配していた。隣連渡は、堤防を越えて来たあとに診療所方面から来たらしい。五天王はたりしていたら波にさらわれたと思う。これも後で聞いたことだが、あの人がいない、あの人はどうした、と言い合って心配していた。隣の人がいない、あの人はどうした、と言い合って心配していた。隣がられていたのは、外出先でのことだった。高台に上りていたが無視した。靴下をはくのも大変なのでいつも素足で過ごしていていたが無視した。靴下をはくのも大変なのでいつも素足で過ごしていていたが無視した。靴下をはくのも大変なのでいつも素足で過ごしていたが無視した。

きの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。 きの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。 きの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。 きの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。 きの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。

えられない母のために私ができることはそれくらいだった。山を越の真ん中で火の粉を避けて助かったという話だった。近所の人から使った。火に囲まれた時、掛け布団を水で濡らし、それで身体を覆って畑は昭和36年5月の三陸フェーン大火の被災者から聴いた話を思い出しは昭和36年5月の三陸フェーン大火の被災者から聴いた話を思い出しなかったので、充分ではなかったが残ると言って、三男に私を連れて山を登れと指示を出した。私登れと言った。私は母がいるからと言ってためらった。夫はここには夫はそのとき、最悪の事態を考えたと思う。私に三男と一緒に山を

の指導もしたという。協力して防火に努めたということだった。奇跡のようなものだと思った。そこには消防団〇Bの人がいて、防火そうだ。強い風もなく風向きも幸いしたのだと思う。これらのことはで家に火が燃え移らなかった。残った人たちはここで一夜を過ごしたなり古い木造家屋もあったが、幸いにして庭の木や小屋が燃えるだけこの避難所の山間には無人の家も含めて10戸ほどの家があった。か

大変だった。そこで五天王避難所へ行く道を探していた消防団員3名に出てしまった。崖でつかまる草も少なく、サンダルも脱げてしまい私たちのほうは熊野神社に行くつもりで山を登ったが、診療所の方

の人は奥さんを助けることができなかったという。 の人は奥さんを助けることができなかったという。 の動線の重要性を痛感した。熊野神社を通って田老一中の体育館の裏の動線の重要性を痛感した。熊野神社を通って田老一中の体育館の裏の動線の重要性を痛感した。熊野神社を通って田老一中の体育館の裏に出た。ここで近所の人たちと出会った。着いたのは明るいうちだと思う。山を登れたのは3月にしては珍しく山に雪がなかったからだと思う。の人は奥さんを助けてもらい、熊野神社へ出ることができた。今考えれば、に出会い助けてもらい、熊野神社へ出ることができた。今考えれば、

凌いだ。 をいだ。 をはご住職にお願いしてセーターや靴下などを出してもらい、寒さを裏手の線路から下りるとき、知らない人に背負ってもらった。常運寺人たちに助けられながらライトを頼りにトンネルを抜けた。常運寺のた私に消防の人が中学生の運動靴を持ってきてくれた。三男や近所のに言われて線路をつたって避難した。崖でサンダルを落とし素足だっ20時ころに、延焼する恐れがあるとのことで常運寺に移動するよう

きるときも人の手を借りなければならなかった。イスを2つ並べ、座布団を敷いてベッド代わりにした。寝るときも起して支えてもらいながら歩いた。床に寝られないので背もたれのあるすぐに山を登った後遺症が現れた。翌日から細い角材を杖代わりに

はふれあい荘に移されたと聞き、ほっとした。 次の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、次の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、水の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、水の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、水の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、

母のここがふ记ぎ、参察所の県日も上こ母の兼子を尋ねこら、も上長男は田野畑村の知人の家に、仮設に入るまで下宿させてもらった。上が避難していた。常運寺では夫と私、次男と三男がお世話になった。常運寺では、グリーンピアに移るようになる4月1日頃まで50人以

てきてくれた。母は、そのときは元気そうだった。は携帯で私たちの写真をとって行き、その日のうちに母の写真をとっ母のことが心配で、診療所の黒田先生に母の様子を尋ねたら、先生

私たちは津波のせいで車を3台なくしてしまい、ガソリンもなかっ私たちは津波のせいで車を3台なくしてしまい、ガソリンもなかった。金中、一度だけ三男に母への手紙を託し、ふれあい荘にので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況をので母の所へ行けなかった。

とれるようになってきたが、下肢の機能は回復が無理だった。とれるようになってきたが、下肢の機能は回復が無理だった。徐々に家でいった。いつ何があってもおかしくないという状況だったのだが、か診てもらうことができた。そうこうしている間に、少しずつ良くなっか診でもらうことができた。そうこうしている間に、少しずつ良くなっか。ないにがいるとは思わなかった。相撲が好きなのでその時期にあら食べさせたい、ということでお願いした。黒田先生が、ボランティら食べさせたい、ということでお願いした。黒田先生が、ボランティられるようになってきたが、下肢の機能は回復が無理だった。

かいられなくても、毎日ふれあい荘に通った。ど毎日病院に通い、退院してからも大丈夫と思うまで、少しの時間しうだし悔しいという思いだった。車が1台手に入ったので入院中は殆たのに、この震災のせいで具合が悪くなってしまうのは母がかわいそ津波に負けるのは悔しい。母と一緒に、何年も穏やかに暮らしてき

い家に誘っても、ふれあい荘から動こうとしなかった。 この震災のせいで母は心も体も疲れ切ったのだと思う。いくら新し

い果たしたのではないかと思ったくらいだった。 らだった。私たち家族はあのとき、自分たちの人生のよい運を全て使らだった。私たち家族はあのとき、自分たちの人生のよい運を全て使れば、歩けない老人を介護している私たちが家族全員無事だったのは、と思う。夫が家にいなければ、どうにもならなかった。振り返ってみと思う。夫が家にいなければ、どうにもならなかったら、夫は出かけていた

のお風呂に入るのは困難だった。テルの7階のシャワーのある部屋に割り当ててもらった。私は自衛隊だろうか、定かではない。身体の状態を考えてくれたのだと思う。ホーグリーンピアのアリーナにはあまり長くいなかった。1週間もいた

『こ川っ越した。 6月12日に仮設に移った。今の家には、平成24年3月24日の大雪の

感謝したい。

「の説住宅は、夏が暑くて大変だった。若い人は閉めて寝たい、私はのの別でで、特に要望はなかった。むしろ、自分たちも我慢しなければとがたいと思った。快適に過ごしたいとは思うが、ここまで支援しても開けて寝たい。冬は部屋が小さく大人が多いせいか暖かかった。あり開けて寝たい、夏が暑くて大変だった。若い人は閉めて寝たい、私は

なかった。 ななかったで、これはど重かったベッドは影も形も母のベッドの下の床は抜け落ち、あれほど重かったベッドは影も形も一被災した家の2階は濡れずに物は無事だったが、1階は無惨だった。

ました」と言われてありがたかった。私たちの家があった場所は荒谷で、この方はどうしたのだろう、助かったのだろうか、と心配していけ取りに警察に行ったとき「袋の中に身体障害者手帳が入っていたの自衛隊の人が通帳や印鑑の入った袋を見つけてくれた。その袋を受

~~~。 て、大切なものが流されず残ったため、後に面倒な手続きをせずに済状況からも水の勢いが小さくなったことで水の流れる方向もあいまっ地区のはずれの方で、海から離れている場所だったこと、家の周囲の

### (3) 一人暮らし

大きな地震がおきた。このお話を伺ったのは2012年9月11日であか屋(船の作業小屋)でカラオケをしていた。終わって家に帰るときに、力で移動することができる。地震がおきたとき、荒谷地区にあった浜力で移動することができる。地震がおきたとき、荒谷地区にあった浜方が強動することができる。地震がおきたとき、荒谷地区にあった浜方で移動することができる。地震がおきたとき、荒谷地区にあった浜方で移動することができる。地震がおきた。 (昭和17年生、元は荒谷中) は、4歳のときにくも膜下出血で倒れ、5年間意識不明の状態だったが、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では、2000年では2000年では、2000年では、2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では200年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2000年では2

のボンベがものすごい音を上げて燃えているのを見た。 
ていた。自分の家も流され、すぐに見失ってしまった。プロパンガスていた。自分の家も流され、木の葉が流されるようにぐるぐると回って行くのを見た。家が流され、木の葉が流されるようにぐるぐると回っていた。自分の家も流され、木の葉が流されるようにぐるが私を引っ張り、 
駐館からみると、大きな番屋が堤防の上を越えてくるのが見えた。 
避民館からみると、大きな番屋が堤防の上を越えてくるのが見えた。 
避民館からみると、大きな番屋が堤防の上を越えてくるのが見えた。 
避民館からみると、大きな番屋が堤防の上を越えているのを見た。 
のボンベがものすごい音を上げて燃えているのを見た。

き、また1泊した。 下り、ふれあい荘のバスが田老駅に駐まっていたのでそれに乗って行た。1人に1人自衛隊の人が付き添ってくれた。田老駅からロープでて、15人ほどで線路を伝って歩いた。12日の夕方、暗くなっていた時だっても公民館も総合事務所も危ないというので、自衛隊の人に連れられるの後、常運寺に行ってひと晩泊まった。山の上から火が来て、お

まず宮古に向かった。魚彩市場の近くの銭湯に入り、マグロの刺身でさんと一緒にグリーンピアに行かなければならないと思ったが、車でふれあい荘ではいろいろな情報が伝わってこないと感じたので箱石

建てたい。 した。市の方針が出たらすぐにでも家を建てるつもりだ。海の近くにした。市の方針が出たらすぐにでも家を建てるつもりだ。海の近くにを探し、陣取って過ごした。4月3日以降はホテルの畳の部屋で過ごてからグリーンピアに行った。グリーンピアの中で、よさそうな場所ビールを飲んだ。箱石さんの家が宮古にもあったので、そこで1泊し

予定である。 暮らしをしている。弟の手を借りながら、三王団地に住宅を建設する 赤沼さんは2015年12月末現在もグリーンピアの仮設住宅で一人

# **3 福祉施設における震災当日の状況と経過**

動したかについて知ることができる。の対応を、高齢者、障がい者の順に紹介する。職員たちがどう考え行の対応を、高齢者、障がい者の順に紹介する。職員たちがどう考え行ここでは、要援護者を多数受け入れサービスを提供している事業所

## ① 高齢者の事業所

#### みれあし羽

けることはなかった。田老川の上流域ではあるが、少し高い場所にあるので津波で被害を受い。ふれあい荘は宮古市田老養呂地という海から約3ホーーニム山側にある。ホームふれあい荘に勤務していた。2013年9月11日にお話を伺っまれるの会理事長である赤沼弘さんは、3・11当日は特別養護老人田老和心会理事長である赤沼弘さんは、3・11当日は特別養護老人

ることが心配だったという。 お沼さんに迷いはなかった。ただ、外部から病気が持ち込まれ入れる」という方針を施設長とともに打ち出した。職員は戸惑ってい害が起きたと知るとすぐに「被災した住民が避難して来たら全て受けがある、ということについて話しを聞いていたこともあり、大きな災がある、ということについて話しを聞いていたこともあり、大きな災がある、ということについて話しを聞いていたこともあり、大きな災がある、ということについて話しを聞いていた。職員は一次の人が、大きな災がある、社会福祉法人には社会に対して果たさなければならない責務

> 作成して発行した。 作成して発行した。 た情報 「ふれあい荘ニュース(NO.1:3月15日~NO.6)」を くて不安を感じている人が多いだろうと考え、入居者、避難者に向け 市から届くべき食料が他所に回された時に少し混乱した。情報が少な 料は神田の自治会と役場から蕎麦をもってきてなんとかなったのだが、 避難中の食事づくりは入居者、避難者、職員で協力して行った。食

ついては心配がいらなかった。つくれなかった。おむつ、薬がなくなることもなく、入居者のことにという打診はあったが、うまく機能しなかったし、働きやすい体制を介護福祉士会や岩手県社会福祉協議会などからスタッフを派遣する

料をもらっているため優先すべき、という思いはあった。てきた人たちは高齢者ばかりで、職員の立場で言えば、入居者は利用は難しかった。帰っても電気、水道、食料がなかったからだ。避難し避難者への対応については、家が無事な人を家に帰す、ということ

かを明示して情報共有していかねばならないと考えている。れていた。備蓄品、食料や毛布などについて今後は、どこに何があるま入居になった人もいた。しばらくの間は定員より多い人数を受け入ショートステイの利用者は、自宅に帰らずふれあい荘にいた。そのま弱い人はこっち、というような振り分けは難しかった。デイサービス、暖房があり暖かく居心地がよかったはずだ。しかし、元気な人はこっち、暖房があの体育館に避難していた人は寒かったと思う。ふれあい荘は床

次に、同じく特別養護老人ホームふれあい荘の主任介護福祉士兼ケ

時のメモを見ながら話してくれた。 月12日に話しをきいた。上山さんは利用者や職員の様子について、当アマネジャーである上山ヤス子さん(昭和29年生)に、2013年9

地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないの地震が起きた。

が美味しかったことをよく覚えている。 支援物資がありがたかった。職員の家からの差し入れも届き、卵焼きかった。被災後に山側の集落からおにぎりが届き、とても助かった。こら」に寝る、という状況だった。電気は2、3日後に復旧したのでよ私は震災後ずっと家に帰らなかった。寝る場所もなかったので「そ

た職員もいたが、お互いに助け合ってやってきた。市など、もっと大変な処へ行ってください、と頼んだ。家族を亡くしの方を一度受け入れたが、職員だけでなんとかできたので、陸前高田他機関からの援助についてだが、八戸の施設や大学、介護福祉士会ろを辿って安否確認をして、職員は全員無事だということがわかった。家族の安否確認のために職員は交替で家に帰した。いろいろなとこ

よい方だと思っている。高台に移転することに決めている。 私は、家はなくしてしまったが、身近な人が亡くなっていないので

**ょい、また帰りたいと言う。津波から逃げてきた人も、本人は認知症つし、流れてしまった家のあった場所を見に行ってもすぐに忘れてし認知症の方との関わりでは辛い思いをする。よく家に帰りたいと言** 

出さされてしまい辛くなる。があると忘れてしまっていて、話しをするたびに私はそのことを思いがあると忘れてしまっていて、話しをするたびに私はそのことを思い

言葉を重く受け止めている。死にたくない」と言う人がいる。老人は強いと思う。人の尊厳という死にたくない」と言う人がいる。老人は強いと思う。人の尊厳といういをしている。強い気持ちでいないといけないと思っている。「仮設で地震のあと、私は3・11の日には休みをもらって、堤防にあがり弔

#### 清寿荘

生活だった。

生活だった。

地震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステル震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステル震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステル震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステル震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステルで

2時に近くの別の介護施設の方がここに送り届けてくれた。 い。医院の判断のおかげで助かった。その方については、12日の午後とできくと、その医院の院長の判断で避難させて全員無事だったらしを通って確認に行ったがその医院は被災していて誰もいなかった。あを通って確認に行ったがその医院は被災していて誰もいなかった。あた出していた入所者が戻ってきていなかった。夜になって職員が裏道スとを検討し、段取りを決めてすすめた。その日たまたま通院のため3・11の日、16時に、施設内の災害対策会議のメンバーでその後の

12日は一般の避難者が訪れた。要援護者7名(介護度が出ている人) 12日は一般の避難者が訪れた。要援護者7名(介護度が出ている人)

く要求してきた。18日に再び水道が止まった。ついては全員が要求したわけではないが、元気な男性の方がかなり強いて、厳しくいろいろと言われてしまい、本当に苦しかった。食料に料は少しだけ残っていた状況だった。入居者にはガマンできない方も15日にようやく電気が復旧し、宮古市から食料が届いた。15日に食

間一睡もできなかった。態の方2名は院長室で休ませた。その方たちに付き添った職員はその態の方2名は院長室で休ませた。その方たちに付き添った職員はその一般の方は静養室で休んでいた。夜通し騒いでいるような不穏な状

の復旧は3月15日、水道は19日、お風呂は23日から復旧した。26日にのように他所の人にもらう、ということも耐え難かったと思う。電気入浴もできず大変だったと思う。帰りたくとも帰れない。食料を毎日テーションを通常に戻すことができたのは23日だった。女性の職員はいる体制なのだが、この期間は職員で24時間体制をとった。職員のロー1日から14日は殆どの職員が泊まり込んだ。通常は夜間に支援員が

般の要援護者が避難所の家族のもとに移動していった。

されたままである。 度の中では職員の分を確保するのが難しく、そのことは課題として残設長会議でも情報を共有している。民設民営と異なり、指定管理者制設長会議でも情報を共有している。このことは県内の養護老人ホームの施食糧入居者50、デイ利用者20、ショートステイ利用者2、一般10×5日食糧入居者食糧については、震災後に災害対策会議で検討して、今は備蓄

いが、それを考えれば宮古市はよかったと思う。り厳しかったと聞いている。大槌はヘリコプターで食料が届いたらしんでもない人数(200人くらい)の方が入って食料が足りず、かな自衛隊が宮古市からひきついで運んでくれた。大槌の特養施設ではと震災当時の食料は、15日に宮古市の職員が来て、その後3月21日に

見ているし。 見ているし。 見ているし。 最後の話は、職員同士の会話にあまり出てこない。話題も少ない。 最近の話は、職員同士の会話にあまり出てこない。話題も少ない。 最近の話は、職員同士の会話にあまり出てこない。話題も少ない。

たり散策したりできていたのに、自由がなくなったからだと思う。住宅はなくなって欲しいと言っている人も複数いる。以前は畑を作っ入居者と仮設の入居者に交流はほとんどない。入居者の中には、仮設どんな人が住んでいるか、というのはまったくわからない。ホームの清寿荘のすぐ隣にある仮設住宅について、情報は入ってこないので、

う人なごご。 た人、経済的には裕福だが独居という人、息子が津波で死亡したといた人、経済的には裕福だが独居という人、息子が津波で死亡したとい意災後にホームに入居した人は5名ほどいる。独居で自宅を流され

岩間さんは2015年4月に定年を迎え退職されている。

## 田老福祉センター

和32年生)からお話を伺った。田老地区や鍬ヶ崎などの宮古市北部を担当している鈴木美喜子さん(昭護支援事業所とデイサービスセンターがある。ケアマネジャーとして業上程度しか離れていない。福祉センターには、地域支援係と居宅介宮古市社会福祉協議会の田老福祉センターは田老川の河口から1

震が起きたときは福祉センターにいたそうだ。出したくないことなのかもしれない、と言いながら話してくれた。地鈴木さんは、思いだそうと思っても思い出せないことがある、思い

して、バスなどを準備していた。波が予測されると聞こえた。大丈夫だろうとは思ったが逃げることにラジオをつけた。30セン程度の津波が確認されている、後から3㍍の津携帯電話の警報が鳴った。大きな地震だったので、テレビをつけ、

を見て、あわてて戻ってきた。音かと聞いたら「津波の音です」と言われた。先に逃げた職員が津波ら30分ほどたっていた。ゴォォという音が聞こえて、他の職員に何のうので待っていて、外をみるともう、近くに津波が来ていた。地震か人数は定かではないが、お年寄りはみんなトイレに寄っていくとい

が、後日映像を見たときに、とても怖かった。あるはずの田老の町並みがなくなっていた。実際の津波は見ていないれていた。センター長と一緒に見に行ったら、10㍍先に水が来ていて、マイクロバスに乗って逃げようと思ったが、45号線は瓦礫でふさが

から逃げられなくなるので、4号線にあがる急な坂道にあがろうとした。利用者を逃がし、毛布、薬品を持った。途中で、津波が来るのがわかっていたので、農協の奥の椎茸センターまで逃げようとした。利用者を逃がし、毛布、薬品を持った。途中で、津波がまるのがわかっていたので、農協の奥の椎茸センターまで逃り、進渡が来るとは考えていなかったので、行動するまでに無駄な時間津波が来るとは考えていなかったので、行動するまでに無駄な時間

はおそらく翌日だったと思うが、記憶があいまいだ。 運送まで来たが、警察や消防に止められた。福祉センターに戻れたのと思う。グリーンピアから福祉センターまで7㌔ある。45号線の平内心配になり、暗くなってから書類を取りに戻った。17時か18時だった手がまわって名簿、緊急連絡先、薬が焼失してしまうかもしれないとグリーンピアに行き利用者の様子を見ながら、福祉センターに火の

お世話をして、夜は眠らなかった。てくれた。グリーンピアでは食事の準備や片付けを手伝い、利用者の福祉センターに水は入らなかったし、火は川の向こうまでで止まっ

中には妊婦さんもいた。
利用者も職員も、みな、家族の安否がわからなかった。携帯がつな中には妊婦さんもいた。
の人や、骨折した人たちが運び込まれてきた。骨折した人は応急処置の人や、骨折した人たちが運び込まれてきた。骨折した人は応急処置がる時があり、会話はできなくても、つながったということは生きてがる時があり、会話はできなくても、つながったということは生きてかる時があり、会話はできなくても、つながったということは生きてがる時があり、会話はできなくても、つながった。携帯がつな中には妊婦さんもいた。

者の家族が迎えにくるということはなかった。同じグリーンピアに来になってから、「○○がいない」と言う声が聞こえ始めた。すぐに利用た。感情の高ぶりは感じられない、呆然としている感じだった。翌日かった。利用者は「みんな家が流れたが、おんなじだが」が合い言葉だった。グリーンピアには自家発電があり、真っ暗にならなかったのがよ情報はラジオから得るしかなかったので、一晩中ラジオをつけてい

かった。立ち話で情報が出たらわかるという程度だった。ていても、お互いに来ていることを知らないから探さないので会わな

まま面倒をみてもらいたいという家族もいた。 まま面倒をみてもらいたいという家族もいた。 がリーンピアに戻っても、避難所を移動している場合があり、避難族をみつけた、と思っても、避難所を移動している場合があり、避難にした。北高の避難所に行き、職員と手分けをして家族を捜した。家にした。北高の避難所に行き、職員と手分けをして家族を捜した。家にした。北高の避難所に行き、職員と手分けをして家族を捜した。家にした。北高の避難所に行き、職員と手分けをして家族を捜した。 がリーンピアに来てから、ケアマネとして利用者の状況を確認しながリーンピアに来てから、ケアマネとして利用者の状況を確認しな

だった。

が大さんは、家族に死んだと思われていたという。2日目の夜、宮崎木さんは、家族に死んだと思われていたという。2日目の夜中に自宅に戻っただけで、3月いっぱいはグリーンピアに泊まりの夜中に自宅に戻っただけで、3月いっぱいはグリーンピアに泊まりの夜中に自宅に戻っただけで、3月いっぱいは、家族に死んだと思われていたという。2日目の夜、宮崎木さんは、家族に死んだと思われていたという。2日目の夜、宮

# 宮古市総合福祉センター

田にある。閉伊川流域ではあるが浸水被害はなかった。思い出しながら話してくれた。宮古市総合福祉センターは宮古市小山忘れたくて、記憶があいまいなところがあると言った。記録に基づいて、の管理者である伊藤直子さん(昭和43年生)も、地震のときのことは宮古市社会福祉協議会のデイサービスセンター(高齢者・障がい者)

て歩けないような状況だった。市役所の人たちがイスをもってその人なんとか降りた。周りを見ると、市役所のお客さんたちが腰を抜かし揺れてたいへんな状況だった。車を簡単に降りられない状態だったが波を打つように揺れ、ラサの煙突もぐらぐら揺れていたし、電信柱もきに緊急地震速報が鳴り、なんだろうと思っていたら駐車場の地面が3・11当日、私は山口病院に行っていた。その後市役所に行ったと

くことにした。 うことになり、藤原小学校で運営している学童保育所の様子を見に行たちを座らせていた。これは津波が来ると思って、職場に帰ろうとい

動を始めたと思う。 動を始めたと思う。 動を始めたと思う。 これていた。ゴミ処理場はバスも入れるところだった。15時20分ころに移くのか職員にきいたら、高いところ、ゴミ処理場に逃げます、と言っが鳴り響いていた。高齢者はバスで避難するところだった。どこに行いては危険だったと反省している。センターに戻ってくると防災無線いては危険がから藤原小学校に着いたが、川沿いを来てしまったことにつ

た。
した。職員17名と利用者48名、マイクロバス4台とワゴン車2台を使っした。職員17名と利用者48名、マイクロバス4台とワゴン車2台を使っ引に車いすの方を降ろしたりおんぶしたりしながらバスに乗せて移動障がいのある人たちは「逃げない」と言っていたが、職員が半ば強

高台に着いたあとも何度も余震があり、防災無線も鳴っていた。最高台に着いたあとも何度も余震があり、防災無線も鳴っていた。最知理場の和式のトイレに悪戦苦闘しながら介助をした。 の和式のトイレに悪戦苦闘しながら介助をした。 はことができず、まさかこんな津波だとは誰も想像できなかった。 津波が、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミが、1時間もたつと高齢者は、水も持っていたが、私自身も、第2000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、1000年は、10

デイの職員だけになってしまった。 だりきたりしていた職員が、ゴミ処理場に帰ってこなくなり、やがてた。バスの暖房をつけ暖をとっていたが、センターとゴミ処理場を行っ来た家族もいた。すると残された人たちもどんどん不安になっていっ来た家族もいた。すると残された人たちもどんどん不安になっていっな関にゴミ処理場にいると書いた貼り紙を貼ってきていた。センターの時で暗くなり雪も降ってきたので不安になってきていた。センターのシターに勤務している職員は利用者の支援があり帰らずにいたが、18とうしているうちに、職員が徐々に減っていった。デイサービスセ

皆白した。 問題のでは、ロウソクと懐中電灯を頼りにラジオを聞きながら用者45名と職員で、ロウソクと懐中電灯を頼りにラジオを聞きながらターに戻った。戻ってきたらホールにタタミが敷かれていたので、利満潮を迎えた後も潮位の変化もない、ということを確認してからセンて、利用者には落ち着いていただけるように必死で話して、ラジオで満潮が過ぎてから、センターに戻るべきではないかという意見が出

川のスレスレであふれずこちらにこなかったのだと思う。た人は48人だったので、3人は自宅に帰ったということだ。津波は、で、職員はほとんど眠らず仕事をした。障がい者も残った。バスに残っべッドでなければ寝られない人、トイレが1時間おきの人もいたの

あって凌ぐことができた。 あって凌ぐことができた。 備蓄はなかったが、翌週のものが若干たかな、朝はおにぎりだったかもしれない。次の週に利用者に出す予レーにした。レトルトではなくカレーを作った気がする。それは夜だったかな、朝はおにぎりだったかもしれない。次の週に利用者に出す形かったので、灯油のストーブでご飯を炊いた。その日の朝はカた。夕食はとらなかったような気がする。20時だったので寝てしまった。夕食はとらなかったような気がする。20時だったので寝てしまっず、紅ミ処理場に逃げたのは私たちだけで、情報がなかったので不安だっ

独居高齢者が2人だった。 地居高齢者が2人だった。帰らずにここに残ったのは障がい者3人、に帰った。一人暮らしの人はここに残った。家族はみんな自宅で心配に戻ってきたこともある。町中の人と、磯鶏方面、内陸の人は翌日家気がする。送っていったときに助けを求められたので、その人と一緒から送ったり、迎えに来た方もいたりした。町中の人は送らなかった翌日は、安全な場所や家族のいる利用者については、車両でこちら

も数名の利用者がいた。認知症の高齢者もいたし、介護度の高い方も(火)2人の宿泊があった。それまで徐々に少なくはなっていきながらべ物がなんとかなったので孤立感はなかった。センターには3月22日員は自分たちがなんとかしなければ、という思いしかなかったし、食職員同士で話し合って、被害がありそうな地域の職員は帰した。職

が流され薬もない、という利用者はいなかった。た。薬がなかったので一度職員が家に薬をとりにいった。幸いにも家手がかからなかった。喘息の既往をもっている人はずっと咳をしていいた。宿泊した方は車いす自走の方々だったので、介助にはそれほど

出てしまい、別のデイサービスセンターに通うことになった。出てしまい、別のデイサービスセンターの利用者で、姉と母親と同居している方で、母親は高齢だった。11の発不確認をした時に、亡くなった方の死に顔は笑顔だったという。その後、高齢の母親は、なぜ助けなかったのか、と同じデイサービスセンターの利用者で、姉と母親と同居している方で、母親は高齢だった。11の安否確認をした時に、亡くなった方の所情報を聞いた。3歳の脳性まひの利用者で、姉と母親と同居している方で、母親は高齢だった。11に訪問地区を決めて、職員が2人ひと組で歩いて回って利用者

仮設住宅に住んでいる人はちょっとしたことでイライラしてしまう。仮設住宅に住んでいる人はちょっとした人がいると空気が重くなる。同様災していない人もいるが、被災した人がいると空気が重くなる。同様にまっても辛いことだった。避難所での生活、仮設住宅での生活が難しい人で、宮古市内で受け入れられない人の中には青森に行った人難しい人で、宮古市内で受け入れられない人の中には青森に行った人難しい人で、宮古市内で受け入れられない人の中には青森に行った人難しいる。ある人は在宅に戻ってきて仮設住宅暮らしをしたが、結局仮離にで立てなった。体力が落ち、介護度も高くなってデイサービスを発している。

ろいろな話が少しずつ出てきている。時のことは思い出したくないということであまり聞けなかったが、いビスを行っていて、利用者5人、職員3人が津波にあっている。その他にも、3・11の日は重茂半島の千鶏地区でサテライト型のデイサー

その日は、海がとてもきれいで穏やかすぎて気持ち悪いね、と言っ

いている。 方は亡くなったという。重茂地区は津波がくると孤立する場所だと聞 家族が逃げようと言ったのに、自分は逃げないと言ったらしく、その の近くの利用者もいたのだが、家族に引き渡して帰ってきてしまった。 2時5分に利用者を自宅に送るために動き出したとのことだった。海 ていたところに、大きな地震がきた。利用者に津波が来ると言われて

利用者を家に帰した、ということについては、自宅に帰せば家族が利用者を家に帰した、ということについては、自宅に帰せにったので、とにかく自分と利用者を守るために、大きな地震が起きまったので、とにかく自分と利用者を守るために、大きな地震が起きに暗い雲をみるだけで精神的に落ち込むと言われている。その3人だに暗い雲をみるだけで精神的に落ち込むと言われている。その3人だのまでのか、悪かったのか、という話しは未だにできていない。未よかったのが、という話しないならないというところでもは重茂に行かせていない。それがよったので、今後はそこに建てる予定もない。 利用者を家に帰した、ということについては、自宅に帰せば家族が利用者を家に帰した、ということについては、自宅に帰せば家族が

あるので、とても困った。
でいたので、とても困った。
を組むことから困ってしまった。職員も家族のことがない、シフトを組むことから困ってしまった。職員も家族のことがていたので、水が戻ってくるまでなんとか足りた。また、デイサービかったので、それをバケツで汲んで流した。2つの浴槽にお湯が残っ震災後一番困ったことはトイレだった。お風呂のお湯を抜いていな

ポリタンクで持ってきてくれる人がいた。など、食料の混乱はあった。職員が家にあるものを持ち寄った。水もので市役所に苦情を言ったら、2度も食料が届いてまた届かなくなるので市役所に苦情を言ったら、2度も食料が届いてまた届かなくなる避難所になった、という連絡が入り、援助が必要な方たちの受け入れ避難生活をはじめたあとしばらくして、市役所からセンターが福祉

した、と聞くと、よかったね、よかったね、と伝えながら、自分は辛かっけた、と聞くと、よかったね、よかった。、自分は辛かっにぜんぶ食べられたんだよ」と言った。その後、描く絵はすべて真っにぜんぶ食べられたんだよ」と言った。その後、描く絵はすべて真っにがようだ。おもちゃを出すと、おもちゃをぐちゃぐちゃに混ぜて「波見たようだ。おもちゃを出すと、おもちゃをぐちゃでちゃに混ぜて「波見たようだ。おもちゃを出すと、おもちゃをぐちゃでちゃでおして、津波をで消息がわからなかった。子どもは大人しい子なのだけれど、津波を大は消防署に勤務している。山田町の消防署だったので1週間後ま

今後も話さないと思う。た。親とも、その時の話はしていない。改めて聞くことができないので、た。親とも、その時の話はしていない。改めて聞くことができないので、た。上司は帰れと言ってくれたが。実際に帰ってみたのは2日後だっ

と思う。のか、というのははっきりしないが、精神的なショックは受けているのか、というのははっきりしないが、精神的なショックは受けているここに来ると津波の話しや、同じ話しを何度もする。そこが認知症ないる。認知症も進んでいるかもしれない。普段の生活には支障がないが、がいる。仮設にいてあまり動かなくなったり、転んで骨折したりして利用者がどう変化したか、というと、足腰が弱くなってしまった人

そのときはセンターに戻ってくるように、という風に決めている。している。送迎時が怖い。海の近くに住んでいる利用者も多いので、で、再び同じことがおきたときに動けるかどうかは不安だ。職員とは、で、再び同じことがおきたときに動けるかどうかは不安だ。職員とは、で、再び同じことがおきたときに動けるかどうかは不安だ。職員とは、連波から3年半たって、思い出したくない、というのはあるが、逆に、津波から3年半たって、思い出したくない、というのはあるが、逆に、

どの情報があれば一番よかったと思う。イスに座っているというのは辛かったと思うので、地域限定の無線な山田地区を限定した情報があればよかった。お年寄りがずっとバスのいかがわかったはずだと考えている。情報が一番大事だ。例えば、小どこかとつながっていて、今の状況がわかっていれば、どうすればよ私たちが利用者を守っているときに欲しかったのは「情報」だった。

ぎ言つれている。 のを言う人たちがいて、社会福祉協議会は何をしているんだ、と、まのを言う人たちがいて、社会福祉協議の人たちの中にはハッキリとも設の人たちにとってだけで、社会福祉協議会の役割はそれほど浸透し社会福祉協議会に相談すればいい、という雰囲気はあるが、それは仮 仮設や復興支援センターができたことで、何か困ったことがあれば

介護保険制度が変わっていく中で地域とのつながりをもっと持って

ればならないと思っている。いかなければならない。社会福祉協議会はもっとがんばっていかなけ

じことを聞かなくて済んだと思う(2014年9月9日)。 政とは信頼し合って情報共有をしていれば、いろいろな人が何度も同個人情報の保護ということで、できないこともあるのだろうが、行

#### 鍬ヶ崎の自宅

つかの教室に分かれて入った。教員たちがお茶の準備をしてくれた。ら小学校の方に避難してくださいと指示されて、一緒に行った。いくら小学校の方に避難してくださいと指示されて、一緒に行った。いていてひどい状況だった。そのときには1人で高台に避難した。そちていてひどい状況だった。そのときには1人で高台に避難した。そのと確認してから避難がである。Aさんは、3・11の日は休みで鍬ヶ崎の2014年9月10日である。Aさんは、3・11の日は休みで鍬ヶ崎の宮古市地域包括支援センター職員のAさんにお話しを伺ったのは

走っているときに前方から波がきたのでUターンして小学校に逃げ込話したがつながらなかった。会社員の夫は高浜小学校の近くの堤防を携帯はつながらない状態だった。磯鶏地区にいる息子夫婦や夫に電

ら山側を通って避難所に来て家族に会えた。たという。自家用車は会社に駐めていたので、歩いて会社に戻ってかんだと聞いている。車は途中で乗り捨てて小学校に駆け上がって助かっ

着替えなどをもらって、それから役所に寄って、仕事を始めた。学校に避難していた息子夫婦の顔をみて、豊間根の実家も確認して、世所の人たちに声をかけながら血圧をチェックして、翌朝5時に西中て職場に来ようとしたが来られなかった。12日は血圧計を預かって避とで精一杯だったので、仕事のことは考えていなかったが、翌日になっ遅くになってから冷たいおにぎりが届いた。そのときは自分たちのこ遅くになってから冷たいおにぎりが届いた。そのときは自分たちのこ

省している。

電している。

のあとで考えるとその人たちに対する支援が必要だったと思って反
たい、あれがない、大変だ、という訴えを役所の人間として要望を聞き、
はい、あれがない、大変だ、という訴えを役所の人間として要望を聞き、
はった。避難所で中心となって支援にあたっていた職員たちは、もっ
はった。避難所で中心となって支援にあたっていた職員たちは、もっ
はった。避難所にいる人たちの健康状態の確認に行った。これが割分担をして避難所にいる人たちの健康状態の確認に行った。これが割り担をして避難所にいる人たちの健康状態の確認に行った。これが割り担をして避難所にいる人たちの健康状態の確認に行った。これが

たので、自分自身が被災者だという気持ちはあまりなかった。でいろいろな人に「大丈夫ですか」「辛くないですか」と声をかけていのをもらって食べていた。あとで聞くと、鍬ヶ崎地区は人に知られて動しなければならなかった。市役所に来てから他の職員から食べるも勤しなけを変族も避難所で生活していたが、避難所の食事が出る前に出

いた。私自身も被災したはずなのに、その実感をあまりもてなかったまらなくなった。夫も2週間ほどは仕事に行かず避難所で生活をして人と話せるようになったりしたら、急にほっとして、涙があふれて止して引っ越しをした。友人から郵便が届くようになったり、電話で友間くらい後に夫の知り合いの家を借りられることになり、住所変更を自分たちがいつ仮設住宅に入れるかはわからなかったのだが、2週

の支援はまだ必要だと感じている。の支援はまだ必要だと感じている。とを考えると、その方たちへいるが、いまも仮設に住んでいる方のことを考えると、その方たちへいるが、いまも仮設に住んでいる方の大変さは自分の中では薄れてきてから乗り越えてこられたという所はある。被災者の中には仕事をなくから乗り越えてこられたという所はある。被災者の中には仕事をなくから乗り越えてこられたという所はある。被災者の中には仕事をなくいるが、少し落ち着いてくると辛さを感じるようになった。他人の体のだが、少し落ち着いてくると辛さを感じるようになった。他人の体のだが、少し落ち着いてくると辛さを感じるようになった。他人の体のだが、少し落ち

きた人で、私自身も海が好きだったので海が近いのもよかったのだが。時に家を建てたいという思いがあった。土地がなかった。若い人にとって1年、2年という期間は長いと思う。若い人にとっういうことがあった。両者の間に、なにかしらしこりは残ると思う。緒にがんばろう、これから別々になったとしても声をかけあって行こういうことがあった。被災した人たちの結束が強かった。これから一高齢者にとって1年、2年という期間は長いと思う。若い人にとってはすぐに過ぎると思うが。私たち自身もできれば以前と同じところ、相にがんばろう、これから別々になったとしても声をかけあって行こ為というであった。被災した人たちの間に、なにかしらしこりは残ると思う。 離れがながったときにもそい人、という区別が起きてしまったと聞いている。後で、家が残ってい人、という区別が起きてしまったので海が近いのもよかったのだが。

## (2) 障がい者の事業所

# みやこワークステーション

被害は受けなかった。 ンの住所は宮古市田老西向山、海に近いがとても高い場所にあり津波の**及川耕一さん**(昭和46年生)から伺った。みやこワークステーショである就労継続支援B型事業所、みやこワークステーションで、職員2013年12月25日に、障がい者が日中通いながら作業を行う施設

ら戻ってくるのに10分ほどしかかからなかった。地震が起きてからずっ議に出席していたのだが、慌ててここに戻ってきた。私自身は宮古か地震が起きたとき、26名の利用者が作業中だった。私は宮古市の会

「耳髪汀に思ったこな、昼ぼっぽちっぱしなったりだが、]]者だたら煙が上がっていた。行ってみようかと思ったが通行止めだった。来ると思った。木が砕ける音、建物が壊れる音が聞こえた。田老を見と胸騒ぎがしていた。海を見たら波がひいていたので、これは津波が

が、重大なことにはならずに済んだ。利用者が服用しているような薬 聞いている。家が浸水している方は避難所に送り届けた。家に帰れな 戻ってきた。利用者を家に送り届けたとき、親御さんは喜んでいたと で雑炊をつくり、トイレは園庭にある噴水の水をくんで使った。授産 ければならないと思っている。水も重要だ。 として持ち歩いている人はいると思う。非常食は日頃用意しておかな の予備は病院が出さない。震災後に、自分自身で考えて夜の分を備え い利用者と過ごしている間、夜の薬がないということが不安になった 送迎に出て、 いてあり持っていないので、興奮したり、落ち着かなかったりしてい 福祉避難所にもなっていなかったので、一般の避難者は誰も来なかっ 品のキャンドルが1千個あったのでそれを灯りにした。この事業所は 町出身だったが家に帰れない状態だった。食事は都市ガスがついたの 通行止めで帰れなかった利用者(9名)は戻ってきた。わたしも大槌 家に帰そうと思い、送迎車で出発した。 た。それをなんとか落ち着かせて寝かせた。職員は6人勤務していた。 取り残されるような不安はあった。利用者は夜の分の薬は自宅にお 事業所に戻ったとき、電気も電話も使えなかったのだが、 水はありませんか、と聞きに来た人が1人くらいいた程度だった。 その日戻ってこなかった者が2名いたが、翌日になって 裏道を通った車は帰れたが、 利用者を

かいたが、その人は被災していない。
で、その片づけに追われていた。利用者の中に一人暮らしの人は何人の中から人や物を探したりしていたらしい。私も親戚が釜石にいるのになってからだ。サービス再開までは、職員は避難所にいたり、瓦礫たので、再開が遅くなってしまった。固定電話がつながったのは5月ているのだが、当時食料が手に入らなかったしガソリンや電気がなかっ4月1日に利用者の受け入れを再開した。事業所では食事提供もし

## レインボーネット

いるので津波の直接的な被害は受けていない。レインボーネットは、宮古市緑ヶ丘にある。海からも川からも離れてから2014年9月10日に、在宅の障がい者についてお話を伺った。NPO法人レインボーネットの相談支援専門員である加藤伸二さん

いたい心理が働いてすぐに対応を考えられなかった。 準備を事務局でしていた。地震のとき、1階で就労・支援センターの れだったので、段々不安になっていった。たいしたことはない、と思 か揺れが収まらず、それに電線が切れるのではないかと思うような揺 た。正直、たいしたことはないだろうと思っていた。しかし、 は利用者がいたので、目の前の公園に避難させようということになっ 相談支援事業所には通ってくる利用者はいないが、多機能型の施設に 所長と話をしていた。携帯の緊急地震速報が鳴って大きな揺れが来た。 ると不安定になるので、在籍期間はなるべく長くしてもらっている。 のHPにも掲載されて注目された。精神障がい者の方は担当者が変わ 資格を持っている人を出してもらっている。この運営方式は、 社会福祉協議会等からも出向して来ている人がいる。社会福祉士国家 従事している。この事業所は4市町村から委託料を得て運営している。 1日にNPO法人化された。私は、社会福祉法人若竹会の職員として 3・11の日は年度末だったので自立支援協議会の親会(全体会)の 相談支援事業所は中立公正でなければならないので、平成20年4月

がら行ったり来たりしていた。るので、そこに行こうということになった。どうしようか、と考えなとりあえず避難しなければと思い、宮古消防署の裏に職員駐車場があ人が大勢逃げてきたことや、消防団からの避難指示が聞こえたので

がいたので、なんとかならないか、と言ったら小部屋を用意してくれた。くらいの方が避難してきて受け入れたときいている。自閉症の利用者は上がらなかったが、宮古地域振興局に避難した。そこには500人えたのか、怖くて震えたのかわからないが身体が震えた。事業所に水側溝から黒い水が吹きあがって、それが浸水しはじめた。寒くて震

う情報が入った。 そうしている間に、宮古市内が津波で大きな被害を受けている、とい

うことになった。

うことになった。

が出勤できなかったのをサポートしようといば3日後くらいだ。それから自分たちに何ができるか、と考えたときに、ほったが、利用者を確実に家族に帰さなければならないということを思ったが、利用者を確実に家族に帰さなければならないということをところではない、と考えたい心理があった。自分の家に帰りたいとは利用者を守らなければならないという心理や、ここは被害が大きい

ことができた。ぞれ自分たちの利用者の安否確認に動いたので、そこから情報を得るぞれ自分たちの利用者の安否確認に動いたので、そこから情報を得るなかった。安否確認にあたった職員は4人程度だった。事業所がそれ者の安否確認をしていった。関わっている方の中で亡くなった方は少次に、自転車を使って避難所をまわりながら通常関わりのある利用

て費用が支払われるようになった。と思う。この事業所は後で福祉避難所に指定されて受け入れに当たっ、地震のときは、利用者は帰宅前で事業所にいたため無事だったのだ

してくれた、と答えている。たが、予測したほどでもなかった。当事者の家族も周辺の人が優しくが、予測したほどでもなかった。当事者の家族も周辺の人が優しく新聞等で、自閉症の方が排除されているのではないかとの報道があっ

校で一夜を過ごした。家族が揃ったのは3日目か4日目だったと思う。私の長男は蛸の浜で釣りをしていたと、あとで聞いた。次男は中学私自身は、利用者を自宅に帰すことなどまったく考えなかった。を自宅に帰したため、利用者が多数亡くなってしまった事例があった。発見して避難所に連れて行った。大槌町の施設で発災後すぐに利用者3・11当日、ある事業所から帰された利用者を私たちが駅の近くで

員が県から派遣されてきて安否確認をすることになった。それはこちん相談が入ってきて、忙しくなった。1か月後に内陸の相談支援専門、職場が通常の業務に戻ったのは6日目くらいで、その後にはどんど自分がどうやって自宅に帰ったのかは覚えていない。

らでは全て終わっていたが、再度同じことが行われた。

たが、支援につながったケースは予想に反し1件だけだった。なっていたからそれほど大変ではなかった。いろいろなところを回っそういう人たちは助かったと思う。私たちは複数の相談員がチームと他の地域の事業所は相談支援員が1人、というところもあるので、

そうなれない。派遣チームが来ると別の気を遣ってしまう。とうなれない。派遣チームが来ると別の気を遣った。こちらも普通の状態ではないし、慣れた頃に交代になるから、機関から派遣されて来る人については、どんな人が来るかと思って気機関から派遣されて来る人については、どんな人が来るかと思って気機関から派遣されて来る人については、どんな人が来るかと思って気にだった。こちらも普通の状態ではないし、慣れた頃に交代になった。他の社会福祉士会がサポートする、という体制をとることになった。他助け合う体制があるとよかったとは考えている。平時から何かあったらで関わってくれたらよかったとは考えている。平時から何かあったらいだった。

かできないか、というものだった。家族は施設に入れたくない、といやってきた。大便を口に入れるというような最重度の対象者をなんと最初にきた相談はよく覚えている。通所の職員が疲労困憊した顔で



写真1 被災した施設 山田町船越 2011/04/05 撮影:加藤伸二

う思いで在宅生活を続けていた。40代半ばの対象者で施設に入ることができたのだが、しばらくして亡くなってが、しまった。在宅の障がい者は、は悪としては福祉避難所扱いになった施設が対応した。他になった施設が対応した。他がは難しかっただろうが、対応は難しかっただろうが、対応は難しかっただろうが、対応は難しかっただろうが、対応はないで在宅生活を続けて

障がい者の中には親が亡

なった当事者の中で、 くなったことを辛いと思うことができない方がいる。 大切にしていた人形を持ってきてほしい、という人がいた。自閉症の 複雑な心境で支援したのを覚えている。 お母さんが亡くなったことを悲しまなかった人がい お母さんが亡くなったことを悲しまずに、 そのことは、と お母さんが亡く 私が

JDDネット ができた。JDF(日本障害フォーラム Japan Disability Forum)、 団体がどんどん入ってきた。それらに対応することも私たちの責務だ Disorders)など、有名なところも無名なところも、 と思った。いろいろな支援をいただき感謝している。 事業所は浸水しなかったのでパソコンも無事で電気が戻って仕 (日本発達障害ネットワーク Japan Developmental ありとあらゆる

うにみていたが、それらの見方が変わったことだ。 震災後大きく変わったことは、 以前は災害のニュースを他人事のよ

#### わかたけ学園

親は近くの高台 宮古市で生まれ育った。鍬ヶ崎の出身で、実家は流された。 障がい者支援施設 施設の応接室で2014年9月11日にお話を伺った。 (熊野神社)に避難して無事だった。 わかたけ学園職員の藤澤順子さん(昭和3年生) 藤澤さんは、 実家の両

ある方たちだ。海から離れ、 なかった。藤澤さんも、手元の記録を確認しながら話してくれた。 わかたけ学園は宮古市の崎山にある。利用者の多くは知的障がいの 高台にあるので津波から避難する必要は

前には施設に到着した。 があった。 に待避しているところへ合流した。停電しているという事実がわかっ 大衆演劇の観劇に行っていた(12、13名の利用者を4、5名の職員で引 3・11の日は利用者を引率して磯鶏地区にある「ホテル近江屋」に 佐原地区をマイクロバスで学園に向かって走っているときに地震 携帯の緊急地震速報が鳴っていたのでとても驚いた。 14時に全て終了してホテルを出発したのが14時半ごろ 学園の利用者たちが職員と一緒に小グランド 15 時

写真3

たき火で温かいス-

写真2 小グラウンドに退避している様子 2011/03/11 配慮した。 ニック状態にならないように 中で暖をとらせ、 ンをかけ、 用車や職員個人の車のエンジ 者を入れることができず、 の大食堂には長時間、 震基準を満たしていない当時 ている利用者が寒さで震えて てきた。小グランドで待避し

りの利用者をまとめて避難で トイレはくみ取り式で使用で 噌汁を食べさせた。 なる前に副食とおにぎり、 だったので、 の布団を全て運んで体育館に とにした。職員は100名分 支援学校の体育館を借りるこ きる場所として隣接する恵風 を準備する一方、 食が途中までできていた状態 敷く作業をした。 職員は自家用車の発電機 17時過ぎの暗く 厨房では夕 100名余 居室棟の 味

–プをつく

2011/03/12

ワンセグでテレビがみられたのだと気づいたが、そのときは思いつか なかった。頻繁に流れる災害放送のみで、とにかく情報がなく、 たのもその時だった。電話もテレビもつかなかった。落ち着いてから

市内がどうなっているかわか

暗くなってきて、 雪も降っ

いたが、余震が続く状態で耐

利用 公

利用者もその車の

利用者がパ

恵風支援学校に移動する準備が整った頃は、辺りは暗がりで路面が恵風支援学校に移動する準備が整った頃は、辺りは暗がりで路面が恵風支援学校に移動する準備が整った頃は、辺りは暗がりで路面がためにペットボトルの水を大便の時だけ流すように援助した。重度の利用者の名は環境が変わることで利用者をピストン輸送した。重度の利用者30名は環境が変わることで反射式のストーブも体育館に運び、私たち支援員は利用者が不安がらたり、まとまって就寝させた。懐中電灯や電池の在庫をかき集め、たり期間ではで、緊急事態だということを察知したかのように意外と落ち着いて私たちの指示に従ってくれた。在宅や地域のゲループホームち着いて私たちの指示に従ってくれた。在宅や地域のゲループホームち着いて私たちの指示に従ってくれた。在宅や地域のゲループホームち着いて私たちの指示に従ってくれた。在宅や地域のゲループホームち着いで、野島事態だということを察知したかのように意外と落ち着いて水んでくれた。支援学校の大りに、辺りは暗がりで路面が上が、辺りは暗がりで路面がある。

ら市内の様子を少しだけ聞くことができた。夜が更けてからワンセグり、20時頃事業所の職員が送って来てくれた。その際、その方たちかわかたけ学園から市内のB型事業所に通所している利用者が数名お

て、鍬ヶ崎地区が全滅か?私て、鍬ヶ崎地区が全滅か?私の親もダメか?と口では言いの親もダメか?と口では言い味がなかった。なんとなく、家族は大丈夫…と自分に言い家族は大丈夫…と自分に言い家がはないと仕事に向かえなかった。3・11の日の夜は余震が続き、職員は一睡もできなかった。

料や缶詰を使用し、厨房でつ翌日からの食事は在庫の材

にあるもので乗り越えた。ぎりは13日14時15分に届いたという記録がある。震災後2日間は学園くったおにぎりや温かいスープ、みそ汁を提供した。支援物資のおに

用できたので温かいおかずをつくることができた。とができるレトルト食品も届くようになった。幸い、厨房でガスを使当初は硬くて冷たいおにぎりとパンが届き、しばらくすると温めるこ不安であることを伝えたところ、4日目に給水車が来たと記録がある。自衛隊が市役所の方と一緒に来たのが2日目の夕方で、水と食事が

た。交代で休むためにその中でシフトを作って対応した。したが、普段から宿直勤務を行う職員はほとんどが帰らず支援にあたっさんがいる方を中心に、山を回って安全に帰れそうな人は当日に帰宅態なので、必然的に帰ることができなかった。職員の中で小さいお子私たち職員は当日勤務予定だった交代職員が来ることができない状

者の自宅に向けて無事だという内容のハガキを送った。家族に近況をれてもらうよう依頼した。郵便物が届く頃、夜、職員が手書きで利用6日目(16日)に、ラジオの安否情報に全員無事だという放送を入ない保護者の方が普段週末に帰宅している利用者を迎えに来てくれた。優先的に給油してくれた。5日目に、市内に自宅があって被災してい4日目に取引のある給油店が学園のマイクロバスを含む公用車には



写真4 恵風支援学 ている

たのか確認できると思ってのことだった。伝えるだけでなく、もしハガキが戻ってきたらご家族の方にも何かあっ

受けたことが記録してある。 衛隊から25枚の毛布が支給されたこと、アメリカの報道局から取材をの時の利用者は121名だった。自宅全壊の職員は9名いること、自7日目(17日)薪でお湯を沸かして毎日清拭を行うことにした。そ

所が市内にできている。 た給水車が来るようになった。この頃から、携帯電話の電波が入る場を給水車が来るようになった。この頃から、携帯電話の電波が入る場と沿目(18日)は宮古市から灯油3缶が届いている。大阪市と書い

け仕事を残さないように配慮した。した。日勤者をバスで帰さなければならないので、夜勤帯にできるだし日目(20日)は職員の送迎バスの時間を変更し、勤務時間を変更

移動して入浴することができた。ることになり、この日、震災後初めて20名の利用者がマイクロバスでることになり、この日、震災後初めて20名の利用者がマイクロバスでまた、宮古市崎山にある同法人の「サンホームみやこ」で入浴でき

物資も定期的に届けていただいた。た。それまでは、毎日、朝夕給水車で水や食料を届けてもらい、支援た。それまでは、毎日、朝夕給水車で水や食料を届けてもらい、支援電気が復旧したのは11日目(3月21日)、水道は13日目(3月23日)だっ

た。

12日目(22日)夕食で支援物資のパンを食べているとき、男性利用2日目(22日)夕食で支援物資のパンを食べているとき、男性利用12日目(22日)夕食で支援物資のパンを食べているとき、男性利用12日目(22日)夕食で支援物資のパンを食べているとき、男性利用

が被災して、1晩か2晩は小学校に避難していたが、歩行に障がいが地域の方の受け入れ状況については、ある知的障がいの女性の自宅

のまま施設に入所している。居したが、階段がある建物なので本人は家に戻れないことになり、そあることで急きょ預かったケースがある。その後家族は市営住宅に入

えるように片づけてホームの利用者10名に使用させた。の家」という家族のための宿泊施設があるので、震災後3日目には使無事なホームにまとまって生活していたが、わかたけ学園には「希望ていたが、幸い利用者は被害にあわなかった。ホームの利用者は当初、法人が運営している17か所のグループホームのうち4か所が被災し

ないホームの利用者5名がわかたけ学園本体に宿泊していた。被災していなくても食事の提供ができない、震災の影響で世話人がい重度のグループホームの利用者5名は学園の重度棟に、また建物は

てホテルからの出発が遅れていたらどうなっていたかわからない。津波に巻き込まれずに済んだ。あの時に何かしらのアクシデントがあっ演劇の鑑賞でも、磯鶏地区のホテルを出発する時間が早かったので、だったので、学園のバスは被災せずに済んだ。私が同行していた大衆る・11の日は通常15時に学園を出発する送迎バスが学園を出る前

ていたので、被害から立ち直ることを現実的に考えることができたよを目の当たりにした両親は、高台の神社から家が飲み込まれるのを見鍬ヶ崎地区を通っても、自分が育った場所ではないように思う。津波らった。私は津波に流される瞬間や水が入った様子を見ていない。今、日目だった。夫が山伝いに様子を見に来てくれた時に頼んで調べても実家が津波で被災したので、両親の安否がわかったのは3日目か4

うだ。私は未だに現実を認められないのに。

#### Š

いるのである。

3・11をめぐるさまざまな体験を語る中で、話者は人生を振り返り、3・11をめぐるさまざまな体験を語る中で、話者は人生を振り返り、3・11をのである。

え続けなければならない。

また、ここでは紹介しきれなかったが、介護を職務としていて、たっまた、ここでは紹介しきれなかったが、介護を職務としていて、たったのがと考え、その責任の重さがとても恐ろしかったと語った。
たのかと考え、その責任の重さがとても恐ろしかったと語った。
たのかと考え、その責任の重さがとても恐ろしかったと語った。
ときた人々の語を書いた。まだ若いその女性は、私は自分が命を落としても、たのかと考え、その責任の重さがとても恐ろしかったと語った。